

土壤医検定試験 1 級合格体験記

木谷 祐也*

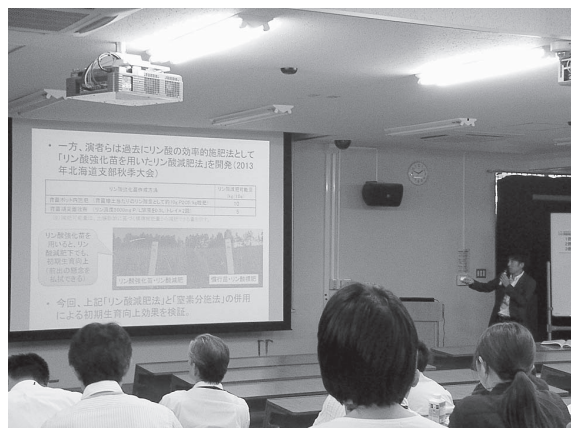
1 はじめに

私はホクレン農業総合研究所営農支援センターに所属しており、主に土壤肥料分野の試験研究を担当しています。主な業務は弊会で取り扱う肥料等の効果検定試験や新たな栽培技術開発に向けた取組です。

大学時代は農学部で学びましたが、土壤肥料学は専攻していませんでした。平成21年に弊会に入会し配属されたのが現在の部署で、以来7年間土壤肥料の試験研究を担当しています。土壤肥料学の知識が無かった私は、配属後すぐに北海道立中央農業試験場（現北海道立総合研究機構農業研究本部中央農業試験場）で研修を受けることになりました。指導いただいた栽培環境科小野寺科長（当時）に最初にした質問が「土壤肥料学とは何か」であり、今でも話の種となっています。ここではあえて紹介しませんが、その質問に答えていただいた言葉は今でも覚えています。半年程度の研修で、土壤肥料学の基礎を教えていただき、研修後も道総研の研究テーマに参画し、さらなる指導を受けました。当時、肥料価格の高騰が続いており、道総研は重点課題としてリン酸に着目した研究を立ち上げました。内容は、①リン酸資源の

見直し（有機物中のリン酸肥効を評価）、②効率的な施肥法の開発、の2つです。半年程度の研修が終了したばかりの私が、小野寺科長のご配慮でこの研究に参画できたことは本当にありがたいことでした。はじめは研修の場としての意味合いが強かったので、しっかりと役割を果たすために必死に取り組みました。ささいなことでも分からないことがあれば何度でも小野寺科長に質問しました（あまりにも電話の回数が多かったため、名乗る前につないでくれることもありました）。3カ年の試験を経て、成果を学会発表する機会をいただくなど、様々なご指導を仰ぎながら、なんとか土壤肥料学の担当者として一步を踏み出せたのではないかと考えています。

成果が出て生産現場と接する機会が増えました。講習会では生産者や農業関係者と直接話し合うこともでき、我々が取り組んだ以外の方法も提案されるなど、生産者はだれより



*ホクレン農業総合研究所

も研究者であると感じます。研究の種は現場にあり、生産者は常にそれを意識していることを肌で感じました。生産現場とともに研究していくという姿勢がとても大切だと思っています。

これから、土壤肥料学の研究者（まだまだ未熟者ですが）として、いかに生産現場に有益な技術・情報をつくり・届けることができるかを常に意識していきたいと思っています。そのために様々な知識・経験を身につけていく必要がありますが、土壤医検定はその一つの指標となりますし、資格が自信につながると考えました。また、自分の取り組んできた分野でどれだけの知識と実績があるのか確かめたいと思い、土壤医検定を受験しました。

2 試験対策

私は土壤医検定研修会には参加することができませんでした。研修会では試験のポイント等説明があると聞きます。また、同じ志を持った参加者とのつながりもできると聞きますので、参加すべきであったと思いました。ただ、結果的に合格することができましたので、参考になる情報をお伝えできるかは疑問ですが、私がどのように対策したのかを書きたいと思います。

①学科試験

私はある程度、試験のための勉強と割り切って取り組みました。試験問題はマーク式の選択問題です。基本的に参考書をマスターすれば問題ないですが、範囲が広く膨大です。これを全て暗記できれば何のアドバイスもありませんが、限られた時間でなかなか困難だと思われれます。そこでまず日本土壤協会から出版されている「土壤医検定試験既出問



題集」で出題の傾向をつかむことが効率的でした。どのような問題がどのように出題されるか、これは過去問によれば年毎に大きくは変わらないと思われれます。出題されるポイントをつかみ、そこを重点的に学習していきました。問題集には問題以外にもポイントが箇条書きでまとめられていますので、問題集をベースに学習しました。同じく土壤医検定試験の参考書は、様々な事例が数多く記載されており、さらに写真・図表も豊富に掲載されているので、単純に読み物として面白いです。ただ、今回は試験のための学習ということで、出題されるポイント部分を中心に参考書の事例や図表等も見ながら理解を深めました。

今回、自分が担当している施肥技術や土づくり等の分野は、復習として非常に良い機会になりました。また、直接は担当していない土壤病害等の知識の幅が広がりました。

②業績レポート

私は、これまで取り組んできたことを、端的に記載することを心がけました。どのような背景でなぜこの試験が必要なのか、どのような成果が得られたか、さらにその成果をどう活用しているかといった一連のストーリーを箇条書きでまとめました。

私は、生産現場に出ることはさほど多くはないのですが、講習会等で研究成果等を生産現場に情報提供する機会があるため、得られた成果の普及活動にも焦点を当てました。

3 おわりに

土壤医検定ができるまで土壤肥料学単体の資格は無く、土壤医検定ができた時は嬉しく思いました。学校では勉強したことはテストで客観的に評価されます。社会ではそのようなことはあまり無いと思います。しかし、私は客観的な評価は自分の立ち位置を振り返る良い機会になると思います。さらに資格は、

他者からの信頼につながりますし、何より自信がきます。

土壤肥料学は、とても実践的な学問です。作物の反応は正直です。気象や人為的条件で常に様々な変化が起こる土の中は、直接目で確認することができません。それを正確に捉え最適な処方を行うことが大切です。これには膨大な知識と経験が必要になります。土壤医検定はその知識と経験の一つの指標となります。つまり、土壤医検定は、土壤を理解し豊かな作物生産を目的とした様々な活動をしていく上での、バックグラウンドとなってくれるものと思います。